

畜産試験場だより

岡山県和牛試験場

長雨の被害は、県北にある当场においても例外でなく、場内数カ所の崖崩れの被害に見舞われました。やがて永い冬がやってまいりますので、場員一同天災を克服すべく、現在連日青刈とうもろこしのサイロへの漬け込みとか、圃場への秋冬作の作付、その他各種の試験調査などに頑張っております。それに県内外の団体視察者が跡を絶たず、嬉しい悲鳴を上げております。

9月1日から和牛審査の新減率がいよいよ施行実施されることになりましたが、それにそなえて8月初め、県内の和牛関係審査員を対象に、当场の名牛千代田号、第4まつよし号並びに第19ちたけ号などを、研究牛として、新見の家畜市場で、審査眼の統一研究会が開催されました。さらに、9月16日から10月3日まで、県内の農業改良普及員の特技研修が行われております。

◎さて、過しよくなってまいりますと、肥育牛を太らせる絶好の季節となります。それで、今回は現在当场で行なっておりますいろいろな肥育試験の概況をお知らせしたいと思います。まず、前年度に引き続き第3回目の2系統の種雄牛について、昨年12月末より、産肉能力検定を約11か月間に亘って若令肥育しながら行なっております。今回は現在県内で供用中の種雄牛の中で最高令で、しかも、神戸で開催されました6県連合共進会において高等登録の部で、チャンピオンになり、目下後代検定実施中の第1大町号と苫田郡で活躍しております種雄牛土屋2号の産犢6頭ずつを用いて検定しております。現在検定を開始しまして、丁度250日を経過し、検定第3期の前半に入っておりますが、その間の増体成績を簡単にお知らせしますと、第1期110日間で、第1大町の方は平均82.2kgの増体をし、1日当たり平均増体量は、0.75kgとなっております。土屋2の方は、平均72.3kgの増体をし、1日当たり平均増体重は、0.66kgとなっております。

また、第2期は第1大町平均87.1kg、1日平均増体量は0.79kg、一方土屋2は平均80.4kg、1日平均増体量0.73kgとなって現在第2期に入っても依然第1大町の方が僅かながら良い成績を示しております。この検定は全国数カ所の畜産関係の試験場、種畜場、京都大学などが協定して、それぞれ同じ条件下になるように実施しておりますもので、当场の今回の検定は、きたる11月24日終了となり岡山県営と畜場で肉質をもあわせて検定する予定です。

◎次に、本年度で第4回目の肥育生産費を引き下げるねらいで行なっております自給飼料を主としての肥育試験ですが、今回は、生後6カ月のいずれも種雄牛千難号の産とくを使って行なっております。試験を開始したのは、去る4月5日から開始しまして、来年3月19日までのいわゆる若令肥育の350日間で、自給飼料を多く与える試験区5頭、普通の飼い方をしています対照区5頭、計10頭を供用して実施しております。飼料の給与基準は、全期間試験区の方は対照区の半分として、現在丁度150日間経過して第2期の前半に入っておりますが、第1期は大切な幼令期を長雨にたたられまして、試験区は対照区の約60%の増体しか示しておりませんが第2期に入りまして、次第に両区の増体の差は、縮まってきております。

次に肥育ホルモン剤による試験を、昨年に行き続き追試験の形で行なっております。すなわち、アメリカ製のスチルベストロール系の商品名スチムプラントと、ヘキセストロールとの合剤の形になっております商品名ヘキセテスの2種類の肥育ホルモン剤について昨年第1回目の試験で増体効果が無処理区に比べて約20%から25%前後高いという成績が得られましたが、増体効果の持続期間が短いという欠点が認められましたので、処理時期の検討をねらいとして、第2回目の試験をおのおの3頭ずつについて行なっております。試験はさる7月4日から開始しまして11月の30日までのいわゆる中期肥育の150

岡山畜産便り 1963.10

日間で、供試牛は生後 15 ヶ月から 18 ヶ月の若牛去勢牛で行なっております。第 1 回の埋没をしましたのが 7 月 23 日で、次いで昨年より短縮しましてどちらも 60 日間の間隔で、第 2 回の埋没を 9 月 21 日に実施する予定です。

以上述べましたように現在当场では、31 頭の試験牛について肥育試験を行なっておりますが、測定調査、飼料給与などと、忙しい毎日を送っております。

肥育牛にとって絶好な季節になりましたので、これから、増体は大いに期待をかけながら試験を進めております。関係者の方々のご来場をお待ちしております。

(和牛試験場技師梶並嘉芳)